合理的「信念」の非合理性－日本的信念の弁証法的解明－

近藤良樹

１．信念は、合理的な確信

（**信念は、十全の根拠をもつ**）信念は、これをいだく者の行動の指針となり、生き方の原理・原則となるようなものを内容とする。信念のひとは、必ずしも多くの者には受け入れられていないその指針や原理を、絶対に間違いないものと見なしてうけいれ、これに従って身を処し、その生き方を揺らぐことなく貫徹していくひとである（信念のこの不動性等については、拙稿「不動の『信念』の動揺」（西日本応用倫理学研究会『HABITUS』２００４年　第１０号）を参照下さい）。信念をいだく者は、その内容を間違いないと確信する。自身を十分に納得させるだけの合理的な根拠が信念のうちには見出されている。

ドイツ語の Ueberzeugung は、確信であり信念という意味であるが、カントは、その『純粋理性批判』で、この「Ueberzeugung（確信＝信念）」について、真と認識するに際して「その根拠が客観的に十分な」ものと規定する。そして、これを、根拠が「私的妥当性」しかもたない単なる主観的な確信「Ueberredung（説得的なもの）」と区別している（A820=B848）。前者は、必然的に万人に妥当するものだが、後者は、「自分以外」のものに押し付けてはならない主観的なものとする（A821f.＝B849f.）。われわれの信念は、このカントの記述にしたがえば、一部の者しか信じないのであるから、「Ueberzeugung（確信）」であるよりは、「Ueberredung（説得的なもの）」になりそうであるが、信念・確信をもつ当人は、「皆は、まだ理解できていないだけで、客観的な根拠のある真実だ」と思っているから、やはり Ueberzeugung であろうか。いずれにせよ、信念は、合理的な根拠付けをもち確信されている。

信念の英訳としてあげられる presumption や conviction は、根拠をふまえての説得的で合理的な確信を意味するといわれている。無反省・盲目的に信じる場合と区別してのことである。conviction は、convince（確信させる、納得させる…con（完全に）　vince（征服する））によるとのことで、説得力ある言説の前での、完全に納得させられた確信・信念である。conviction は、「有罪判決」とか、「罪の自覚」という意味でもあるようで、我々の「信念」にはありえない意味をもつが、罪を完全に承服する、刑罰に十分に納得するということなのでもあろう。

信じる対象は、直接に知っているものではない。つねに懐疑可能性を残す。この懐疑可能なものへのその懐疑を停止して所与の情報を受け入れるのが、信じるということである。ふつう、信じる際には、懐疑を停止することのできる根拠・理由を見つけることをもって、その情報の受け入れの決断をする。確信としての信念は、それだけ確かな信じる理由・根拠を見出して、その根拠をもって、「まちがいない」と確信できているのである。ただし、多くの場合、他のひとは、その信念をもたないのであって、その十全な根拠との理解・解

釈は、当人に限定されたものである。信念をもち、確信する人は、そのものがひとと違いよく見えているか、あるいは、信念の内容をなすもののバラ色に酔い、その輝きに目がくらんで、確信の根拠の不十分さへの注意がお留守になって、十全と感じられているのであろう。

（**合理的な信としての自覚**）信念は、カントの Ueberzeugung のように「客観的に十分な」根拠をもっているかどうかは問題だとしても、すくなくとも信念をもつ当人は、自分のたんなる「思い込み」ではなく、客観的な根拠をもっており、合理的に説明できるものであると自信をもっている。１７世紀、ガリレイは、地動説をもって信念としたが、それは、万人をして説得できるだけの客観性・合理性があるとの自信あってのことであったろう。それは、普遍的な理性において説明できることであり、事実による裏づけももっていた。それゆえに、支配的なプトレマイオス天動説からの攻撃にあっても、その信念を曲げることはできなかったのである。

１５世紀末のコロンブスの冒険は、一か八かの「賭け」であったが、それでも、「大西洋を横断するとインドに行ける」とのその信念には、確かな理由・根拠があったことであろう。王達を説得し、乗組員を募集するには、かれがその確信をもって、そのしっかりした理由を示していく必要があった。あるいは、ヴァイキングがアメリカに到達していたことの話を聞いていたかもしれない。地球は平らという俗説を否定し、これが丸いことを確信させる古代ギリシャ来の諸理論があり傍証となる事実もあった。プトレマイオス（地球中心説＝天動説）を読んでコロンブスは、地球が丸いことを確信していた。だが、誰もそれを実証したものはなかった。疑えば疑えることであった。それでも、未知の世界への冒険心・憧れと、インドとの交易による莫大な富への思いが疑わしいところを隠してしまい、熱望のかなう方面の理由のみが拡大され確信となり信念となっていったのであろう。

「これは、私の信念です」と言われた場合は、それを改めさせようとの説得活動は、ふつう断念する。信念は自らがそれに生き、与し、賭けているもので、説得には応じないとの判断からであるが、もうひとつには、そのひとが、その信の根拠を十二分に解明し合理的に完璧に納得して懐疑を停止して信じるに至っているであろうと想定できることによる。月並みの説得では到底太刀打ちできないことを知っているからである。

自分の信念に対しては、無視・批判の眼があって「まちがっている」と否定されるのだが、これを反論・否定して、自説は「まちがいーない」ものと十分に自覚して信念は堅持される。合理性に欠けるとの批判をふまえて、その欠けるところをうめて完全な合理性を獲得して、信念とする。周囲の多くの者が無視・否定するとしても、それはかれらが無知で間違っているからである。自分の信念こそは真実であり正しいと思っており、皆を説得できるつもりである。「邪馬台国九州説」の信念を持つ者は、九州が好きでひいきしたいからということが心に強くあったとしても、それをもって信念＝確信とするのではない。なんといっても、九州説が「正しい」からである。その信念とするものに自身十分に納得しているのであり、まちがった畿内説を論駁できるとの自信をもってもいる。古文書の解読・

解釈においてそうであり、遺跡をもっての裏付けにも自信をもっているのである。

（**普遍性と、それ故の抗争**）合理的に根拠づけできるとは、理性的に論理展開をできるということで、その根拠とその確信は、普遍性をもつことになる。自分が恣意的にねじまげてへ理屈をつけているのではない。だれが考えても同じ正しい答えがでてくる普遍性をもっているのが、合理的な根拠付けである。したがって、周囲の他者であっても、その理性に呼びかけ合理性に訴えるなら、納得してくれるはずの根拠づけであり確信である。そう、信念＝確信をもつものは思っている。

ガリレイは、好みとして地動説を説いたのではない。太陽の動く方が感覚的日常に合っていて好みにあうとしても、その反対が真実であれば、これを受け入れざるをえない。信念は、真実であるとの確信であり、しっかりと理性的に根拠づけられたものである。ガリレイは、はじめはプトレマイオスの天動説をとっていたが、天体観測のなかから、コペルニクスの地動説（太陽中心説）の方が合理的だと考えはじめ、それが真実の理論だとの確信をもつにいたり、他の人間の理性にもよびかけたのである。地動説は、当時の（宗教的な）権力からは拒否され攻撃されたが、ガリレイは、どの人間の理性にも納得でき、真実と承認できるのが地動説だとの確信・信念をもっていたはずである。

だが、地動説の反対のプトレマイオス天動説（地球中心説）も、地球を宇宙の中心において太陽や星が動いているとの確信をもっていて、遊星の動きも合理的に説明して皆を納得させていたのである。確信＝信念は、理性の普遍的な概念や論理を駆使し、事実をふまえ、客観的で合理的な根拠付けをもって、自分の方が真実で、それに反対する説は誤謬だと主張する。ひとつのことをめぐっての信念は、自身が全体・真実であり、他の同様の、対立する信念とは相容れない関係となり、信念同士の対立・矛盾がここには見出されることになる。普遍的理性的で合理性にのっとっての信念・確信であるから、自分には非はなく、もっぱら相手に非があることになり、その対立抗争は、どちらかが全体･真実と確定するまで、止むことがない。信念の実践は、一方で真実の実現・検証への実践であり、他方で、これを妨害する党派との戦いである。

自分の信じていることは、懐疑可能の信のことだから、間違っているかもしれない、というような謙虚さを信念はもたない。自分の信念とすることは、確信できることであり、理性的に解明され普遍妥当性をもつと自信をもっている。だが、全体・真実は一つしかないのであれば、どちらかが、つまりは相手が虚偽に陥っているのである。相互にそう考えるのであるから、あとは、理性と事実をもって真実を主張し相手を排除して、自分たちが全体を占めて終わりとなるまで戦いつづけることとなる。

ところで、ヘーゲル『法哲学』は、信念（Ueberzeugung 確信）をその「道徳性」の項の終わりに「良心（Gewissen）」の形式としてあげ、これを、「なにかを正しいものとみなす」ものと規定する（『法哲学』　1821 年　§140）。それは、カントの定言命法をうけたフィヒテの道徳論がその根本に「良心にしたがって行為せよ」と「最良の信念（Ueberzeugung 確信）にしたがって義務的行為をせよ」をあげているのを受けとめてのことであった(フィ

ヒテ『道徳論の体系』　1798 年　§13)。この信念（＝確信）は、ヘーゲルからみると、主観的で抽象的であった。自己の理性が「正しい」と判断すればどんなことでも許容するものとしての単なる信念は、客観性を欠落させ「主観的な信念」にとどまり、確信したものが即善として許されるのなら、（当人が悪と思わない限り）あらゆる悪は許されることになるであろうと指弾する（『法哲学』　§140）。主観的には自分の信念は、真実で正しい行動原理である。しかし、それは、対立する諸説をもっていて、それらから見ると、虚偽であり、悪とみなされ、破棄されるべきものである。

（**反対があっての信念は、自己止揚的**）信念は一部の者が信じるものであり、主観的で党派的である。各人の行動の指針・原則は、多様であり、多くの選択肢のなかから、一つをもって信念としているのが普通である。しかも、信じることは、一般に懐疑的なものを残し、かつ、信じたとしても、確信にまでなることは一層すくなくなり、ましてや、信念としてそれに賭けて生きる者はさらに稀れとなる。それにしたがって、無関心・反対の者をそとに多くもつことになる。自分たちの信念を他者がとらないことは、信念をいだくときに、折込済みである。自分の信念が客観的な真実であることを示すには、反対するものを論破し打倒していく必要が生じる。

自らの信念は、全体のなかで勝利することで全体的な客観的真実として承認される信念となる。だが、対立する諸説が敗北を認め、ひとつの説が全面的に真実と承認されたとすると、実は、勝ち残った説も、信念であることはやめる。邪馬台国畿内説が決定的になって九州説をとる者も畿内説になって対立がなくなると、その真実の説は、信念ではなくなる。全員において確信されまちがいないものとみなされるようになると、それにことさらに与してこれを弁明する必要はなくなる。それの証明に懸命になることは無意味となる。つまりは、それに執念をもやす「信念のひと」も消滅するのである。信念は、その信念を無視したり排撃するものがあっての信念であり、そういう相手を失うならば、その信念自体も自己止揚する。

信念の自己止揚性は、このこと以上に、真実の実現・検証の実践の方面にある。信念（確信）が、虚偽と分かったときはいうまでもないが、信念が成功裡に実現されても、それは、止揚されることになる。コロンブスの信念は、インド発見のあかつきには、信じることを不要にし、（俗説を葬り去るとともに）自らも消滅する。信じるものを実現し検証することで、信念は、真実となり、実証知となって、もはや信・信念であることをやめる。対立諸説を虚偽と確定して止揚しつつ、自己止揚する。ただし、生活習慣上の信念などは、たとえば肥満防止のために「夕食は、粗食にすべきである」というようなものは、信仰と同じで、真偽が確定するようなものではないのが普通で、信のままにとどまり、永続する。

２．信念の非合理的な選択

（**採用は、個人的非合理的**）ものごとは、合理的であれば、万人の承認するものになるかというと、必ずしもそうはならない。社会的な複雑な問題になると、理屈はどうにでもつ

けられるから、諸説が競い合う状態となり、合理的なものであっても、それは、真実のひとつの可能性にとどまることになる。「教育の荒廃」に対する改革の主張などでは、たくさんの信念を聞く。「聖職意識の復活が肝心」と主張する人、いや「企業の論理こそを教育に」という人、「日教組がなくなればうまくいく」という者、「文部省を廃止すれば教育はよみがえる」という者、「道徳教育の確立こそを」と説く人、「規則づくめを廃止するとよくなる」と説く人、なかには、「朝食を食べさせれば、万事が好転する」という信念をもつ者までがある。信念は、万人が承認するものではなく、「あれは一部の者が信じているだけのもの」ということになる。

その原理・原則を自らの生き方として採用し、信念とするにいたっているのは、当人においては、合理的でそれ以上に理性的には考ええないからであるとしても、ほかの者が受け入れていない以上、周囲は、そうとはみなさず、個人的な事情で信じるにいたっているとみる。合理的に考えられるもののなかからの一つの説の採用は、なんといっても、一層の合理性があり、客観的妥当性に優れるからである。信念同士の抗争は、形式的には、そのことをめぐってなされる。しかし、それらにさして優劣がないとしたら、理性を越えたものによる選択となる。いわば、非合理的な、個人的な特殊的事情をもっての選択として、信念が存在することになる。

プトレマイオス天動説は精緻で、コペルニクスの地動説と、天体観測上は優劣つけがたいものだった。後者が古代ギリシャのアリスタルコス太陽中心説を復活・採用したのは、プトレマイオス理論の複雑なのに対して、単純ですっきりするからであった、という。だが、現実は複雑怪奇である。「単純だから地動説にした」というのは、現実離れした主観の「好み」に属する選択になるであろう。理性にかなっていて正しく、合理的に許容される多くのなかから、理性の埒外にある自己のなにかが信念とするものを選択させるのである。理屈づけは、どうにでもできるとしたら、ほかでもない自分の行動の原理とする信念であるから、むしろ、はじめから、自分の非合理的な方面からの力が信念の形成に大きな影響力をもっているのかも知れない。

非合理なものとは、ひろくは、願望や意欲、パトス等、理性的な知性の領域以外のものの働き一般において、それらが理性に無頓着に自己主張するものであろう。狭くは、それらの理性外の働きのうち、理性に反しても、これを主張するものとなろうか。信念の場合、確信は理性的であり、この大枠のもとでのものとしては、理性に反するものよりは、これに無頓着なものの方がスムースに信念となりうるであろう。先のコペルニクスの「単純だから地動説を採った」というのは、理性の使用を省エネできるからという、理性外の要請である。理性に反した非合理な情念的なものでも、それを合理的に装えれば、信念となる。学校時代、先生やクラスの者にうとまれていたので、その仕返しをと思っていたとして（これを直接出して「校舎に爆弾を仕掛けた」といたずら電話をするのでは、信念とはならない）、これを昇華して一般化し、それを、「教育を駄目にする教師に鉄槌を！」と街頭宣伝車から叫んで、正当化し合理化できれば、それは、信念となりうる。

自分の熱望する理想・ユートピアに引かれてこのパッションを最大の要因にして、信念が形成されるというようなことになる。宗教的な理想国家建設の信念は、まずは、そういう理想が描かれて、あとで、それを合理的に粉飾するものであろう。政党の信念も多くがそうであろう。自由主義国家にせよ、共産主義社会にせよ、それを信念とする党派のひとは、多くの場合、まずは、自分のパトスを充たしてくれる現実や夢があって、それをあとで、合理的に理屈づけするものであろう。その信念の選択は、合理的に理性で行なっているというより、個人的で非合理なものということになる。

（**好みの問題**）いずれも合理性をもっているのだとしたら、あるいは、理屈はどうにでもつけられるのだとしたら、あとは、好みによる選択となる。そこでは、表には出しにくい個人的事情が、非合理なエゴの欲望がその主役になる可能性がある。この個人的な事情からいうと、信念は、信であるよりは、「願い」「希望」「欲求」である。それに「間違いない」と確信するものであるより、そうで「あって欲しい」と切望するものとなる。それでも、これが願望でなく、信念として自覚されるのは、それが「正しい」「真実だ」と信じることがあるからではある。

そういう個人的な情念や欲望は、あったとしても表には出しにくい。信念は、それを理性的に普遍化して合理化する。表にだすのは、合理性のある確信できるものとしての信念である。だが、うらには、非合理のおどろおどろしい情念がひかえていて、それが信念を実際にはささえていることが、利害関係のからむ社会的な信念ではしばしばである。ここでは、信念の「念」は、個人的な情念であり、執念である。

信念は、信じ念じるが、この「念」は、願いを強くもつ。信念を根底で支えるエネルギーということでは、この「念」「一念」の果たすものが大きいのではないか。そのはじめには、ごく個人的な非合理のおどろおどろしい情念があって、この情念に押されて、その私的な「念」を普遍的公的に装い理屈付けをして、これを信念としているのかも知れない。あるいは、「私」念を昇華して高い精神性をもったものに作り直して、理性的に確信できるようにして、公的な場に登場させるのである。

好きで選択したとはいえ、信念は、誇れるものが内容となるはずで、それをいだく理由が下賤ではつりあわない。動機が不純では、その信念にきずがつきかねない。そういう場合、真の動機は、隠されることになる。本当は、目立ちたがり屋で名誉欲が異常に強かっただけだとしても、それは言えないのであり、「現代の政治的停滞に我慢がならず義憤をいだいて」と心にもないことを言って、政治家として生きる「信念」を披瀝する。

（**党派性**）信念とするとは、それに与するということであり、それに関しては党派的にふるまうことを当然とする。表向きは、他に比して自分の方に一層の合理性があり、それ故に、これを選択し、擁護するのであるが、内実は、しばしば非合理的である。根底にある執念・情念にリードされて、その信念の選択を、詭弁にうったえてでも弁明し正当化する。正しいからそれを選んだのではなく、自分の欲望・希求にかなっているので、それを選んでいるのである。信念をいだいたあとからの、その活動は、通常、党派的に、その弁護を

最大の目的として、それにかなう理屈をあとからつけて、敵対するものを論破し、周囲のみならず、自分自身をも納得させようとする。

「これは、私の信念です」と言われると、以後は、説得することを断念するのは、当人がしっかり理由付けをしていて反論が難しいからという先にあげたことがあるとともに、それは、一見合理性にしたがってことを選んでいるように見えるけれども、内実は、非合理で説得には耳を傾けることをしない私的な情念やエゴの欲望によっていると判断するからでもあろう。理屈で説得しても、その合理性にうったえても、無意味だということである。

（**しばしば狂気のさた**）信念は、当人には、「絶対に間違いない」と確信されている。だが、あくまでも、それは、当人にとどまる確実感であって、周囲は、それを採用していない。周囲は、その信念を否定的に見ているか、無関心であり、信念のひとと周囲との落差は大きい。

周囲からみると、ときに、その信念は、狂気のさたとなる。ハインリヒ・シュリーマンがトロイの遺跡の発掘のよりどころとしたホメロスのトロイ戦役のギリシャ神話は、彼には確信＝信念となった（という話だが、本当のところは、本人のみの知るところである）のだが、その時代、ホメロスの話は、一般には単なる神話だった。それを真に受けて信念とまでしたシュリーマンは、尋常とはみなされなかった。常識的な理性の判断からいうと、夢と現実を混同したものであり、現実的な合理性がなく、その混同や飛躍は、尋常とは思われず、その信念は、狂気のさたであったろう。

コロンブスにしても、多くの者には、狂気のさたであったろう。大地は平らと思い込んでいる素朴な庶民からみると、帰ることのない航海となるはずであった。悪魔がのりうつっていると思われたかもしれない。プトレマイオス天動説が地球の丸いことを前提にしていたとしても、仮説にすぎず、本当は、大西洋のかなたは滝になっていて奈落の底に落下しているのかも知れず、誰一人、これを回って確かめてみようなどという者はいなかったのである。「インドにいくに西回りにとは、なんと無謀なことを」と呆れ顔をされたこともあろう。信念は、その当人には、確信される確かなことであるが、あくまでも個人的主観的なものであり、客観的には、不確かどころか虚偽に近く、狂気のさたとみなされることも少なくない。

３．主体的取組み－ユートピアに生きた信念のひと－

（**自主自律の個人的参与**）信念とするものへの参与は、自主的である。そとから、強要・強制されているものではない。信念は、合理的根拠と非合理の支えを総合して、実践のための万全の態勢をもつ。自分の理性も感性もともにこれに全面的に賛同しこれを自らの生き方とし行動の指針とする。正しいことと判断し、これに自身が生き、与することを決意したものである。

自由な実践主体としての自己というものの存在理由、自己の存在の固有性が信念におい

て顕在化する。自分の信念は、これに賭ける価値があると自らが考えて、これを自らの行動の原理・原則として受け入れ、これに与しているのである。皆が受け入れるからこれに従うというのではなく、その反対で、多くの無視、一部からの非難や迫害にも耐えてこれを擁護しようという、個人の自律の自由をもっての自覚的な参与である。その信念において、自己は評価され非難される。自分には、その信念の存在としてのレッテルが貼られるのであり、それを覚悟し誇りとし、その信念のひととして生きるのである。

（**確信から確言へ**）へーゲル『精神現象学』は、「信念（Ueberzeugung 確信）」は言葉に言い表され「確言（Versicherung）」となって現実的になるという（「精神」の「Ｃ道徳性、ｃ良心」の項）。うちなる信念は、自身には確実でも、これは言表されねば明確にならず、客観的には確定しない。「確言」は、確信しているものを外化するのであり、それによって信念は、自分のうちからは独立したものとなって確定する。うちで確かで不変の信念が対象化されて、一層不変なものとなって確定する。

信念の「確言」は、会話・対話ではない。断言である。一方的な宣言である。自身これに生きるということの、信念堅持の宣言である。対立した者たちへの宣戦布告でもある。そとに出した言葉は、自分の変えたいという制御など受け付けず、自分からは独立して飛び回る。内心にあったものとちがって変えることも消すこともできなくなる。信念の確信の言表は、その内心において確定していたものを、さらに一層明確に固定する。うちで主観的に信念の担い手と自負しているのみではなく、客観的に信念の人として、主体的存在として自己を確立することになる。

信念は、変わらない。うちにある確信の不変性を表明して、そとからも、そういう信念のひととして固定的に捉えられ、そう扱われることで一層不変の主体として存在することとなる。ふと、内心で確信を失いそうになっても、宣言している自分を思うとその迷いは抑圧されてしまう。迷いを感じても、外から信念の人と見なされていると、その迷いはその外の目を意識することによって吹き飛ばされてしまう。

信念をもってすることは、自分が自律的自発的に行なうこととして、自らがこれに責任を負わなくてはならない。結果がさんざんであっても、ひとのせいにすることはできない。そのつもりもないのが自律自主の主体としての信念のひとである。その決意があったからこそ、確信=信念を表明し外に出し、自己の動揺する心のうちから独立させて、不動のものとして宣言したのである。信念をもってしたことでは、「やらされていた」「本意ではなかった」等の弁明はできない。他人でも神でも悪魔でもなく、この私がすべてであり、自らのロゴスもパトスも諸手を挙げてこれに加担したのであり、責任も誇りもすべて自分にあるとその自主・自律を自覚している。

（**純粋・一途**）信念は、これを「曲げる」「曲げない」という。本来的に、一途で、曲がらないのが信念だということなのであろう。はじめから反対・無視があっての信念である。それをはねのけて進むのが信念である。妥協しない。折衷・混合をしない。ひたすらに己の主観の信念を貫徹する。純粋である。自己の原理・原則であるその信念に一途で、これ

を確信しているのであり、他を正しいのかもと振り返ったり、あるいは参考にするということはない。確信するものには、他からの修正は不要である。よい意味で頑固である。おのれの信念には自信をもっており、右顧左眄することなくその原理・原則のもとに真っ直ぐであり、これを「曲げない」のが信念である。「筋を通す」のである。

信念のひとの純粋さは、他と妥協せず孤高を守る姿勢にあるとともに、その信念内容にもある。その信念の選択は自己の好みによっているとしても、その内容をなすものは、理性的な普遍性をもったもので、原理や原則となるものである。しばしばそれは、高い理想である。他からは、下賤と見なされる内容であったとしても、自己自身の評価における下賤なものが信念になることはおそらくない。周囲を排し批判に耐えて誇れるのが自分の信念であり、下賤なものを信念とするわけにはいかないであろう。下賤なエゴを離れて、自他に誇れる高貴で純粋なものが、信念の内容となる。

信念に生きるひとは、理想を追いつづけるひとであり、エゴを排しての理想への無私の献身ということになる。たとえ信念をささえるものは下賤なエゴであったとしても、その実践においてはそのエゴを忘れこれを離れて、あるいは、エゴの下賤なものを理性的普遍の信念にと昇華し浄化して、この理想を一途に追い求めるのである。そういう純粋なものが信念にはある。

（**夢中**）信念のひとは、自主自律の主体的なひとであるが、その信念に懸命になると、われを忘れて、これに夢中になるところまでいくことがある。周囲はそうは思っていないのに、正しいと確信しているのであり、ときには、「狂気のさた」とみなされることともなる。心をその信念にうばわれ他の世事を忘却して、熱中状態にまで関与を深めることがある。

ユートピアにとりつかれた人々は、おのれの信念に生涯を賭けることしばしばである。多くの者が共産主義の理想に人生をかけた。理想社会の実現に無私の献身をし、われを忘れて夢中になって信念に生きた。だが、その確信、純粋な信念は、やはり「信」であり、懐疑可能なものであった。理想社会とのプロパガンダと逆で、虚偽で塗り固められていた。これを信念として生きてきたものは、己の主体性・理性の浅薄さを思い知らされることになった。

４．憑依する信念－没主体の化身状態－

（**とりこになり、憑かれる**）信念は、自律的自己の実践的な確信であり、自主的に与する各個人の原理・原則である。信念のひとは、その自発性・自由の担い手として主体的である。だが、それは、どこかで、逆転・転倒することがある。主人のつもりでその信念に関わっていたのに、逆に、自分がそれの奴隷になって、信念という主人に使われる身に陥るのである。その信念の虜になり、これに憑かれることとなる。

「憑かれている」「とりこになっている」とは、ふつう、それをそとから見て言うことである。信念の奴隷・捕囚になっていると。共産主義等の社会理念・理想に対して距離をおいて見ていた者は、それに熱中する者をみて、そう捉えた。この信念にひたすらとなって

いた者は、「とりこになっている」ことを象徴的に解して、夢中になり熱中して、歴史に主体的に参与していることとしたが、冷静にこれを眺めていた者は、決して象徴的ではなく、抜け出すことができない現実的な捕囚になっていると見ていた。

信念は、当人には合理性をもった正しいこと・真実と思われているもので、憑かれているというようなことは言いにくいものがある。当人は、自信をもっており、理屈では、周囲のものとちがって詳しく、素朴で素直な批判・非難は、その理屈で簡単にいいくるめて反論できるので、奴隷だといっても納得しない。自分が自由に主体的に信念としてこれに献身していることだと自由を意識しつづける。

（**自律・自発なのだが…はめられ、姦計に乗せられる**）単に乗せられているだけなのに、自発的に任意に始める場合、自由に主体的に自分が取り組んでいることだと思うことになる。オリンピックなどの催し物では、しばしば無償のボランティアが使われる。ボランティアは、自主的で、主催者のひとりだと自らを感じ、乗せられているとは思わないが、現実の主催者（スポーツ界のボスたち）は、うまく乗せることができたとほくそえみ、周囲は、かれらは、乗せられていると見、将来のナチス党員にならなければいいがと危惧する。奴隷のような仕事を無償でさせるとしても、これに自発的に取り組むようにもっていければ、「自分で自由に自主的にやっていること」だと思い込ませることが可能である。義勇兵、志願兵は、よろこんでその命までをささげた。だが、果たして、どれだけ、奉げるに値するほどの高貴な理想でありえたか、信念と真実の落差はあまりにも大きい。

信念は、信として、懐疑可能なものであり、大いに誤りうるものである。合理的に冷静に理性を働かせつづけて、誤りと判断した時この信念を停止できる場合には、自律的に主体性は維持しているのである。もちろん、そういう冷静で着実な信念もあるが、そうでない場合が少なくない。信念の主体のつもりでいたのに、いつのまにか転倒して信念の奴隷となるのである。批判精神を維持して、いざというときには、自分の行動を批判的に見直し、その行動の指針となる原理・原則は信念だとしても、これに疑問をさしはさめることがなくては、主体性は危うくなる。信念と距離をおけることである。

（**麻痺し、憑依状態に**）信念とするものに対して、批判精神をもったり、距離をもって見直すことは、それにのめりこむほどにむずかしくなる。その信念を無視したり攻撃するものに対しては、理屈をならべたて理性的にふるまうが、自身に対しては、これに与すればするほど、それができなくなる。

与する信念について、これを守るに懸命で、それが至上の目的となり、常識を失った対応や行き過ぎもだんだん反省することができなくなる。批判的な精神は、麻痺させられてしまう。冷静な自己を失い、信念が憑いた状態になる。自分があって信念を向かいに立てて、納得がいく限りでこれに与し取り組むという冷静な状態ではなくなり、距離がなくなる。信念への批判的な眼は失い、他者に向けられる批判的理性はあっても、その理性は自分の信念には一切向けられなくなって、自己は、信念を擁護し実現するためのロボットになる。信念に自己の脳がのっとられた状態となる。洗脳ということをいうが、洗脳されて、

その信念のくぐつと化す。

（**化身**）信念は、「化身」といわれる状態にしばしば進行する。資本家が資本の化身となって、資本増殖に尽くすように、信念をいだくものは、その信念の化身となって、ひたすらその信念のために尽くす。そのひとは、化身として、その信念のひとと呼ばれる。共産主義の信念は、その化身としての共産主義者をもった。その信念の各個人は、その主義の没主体的手段であり、代替が利く存在として扱われる。

信念とその主体が矛盾して、非両立状態になったとき、つまり、信念を犠牲にするか、そのひとを犠牲にするかというとき、主体がなお信念から自由で憑依されていない場合、理性的な批判をもって冷静に判断して、無駄な犠牲と思えば、おそらくは信念の方を犠牲にすることになろう。自らの行動の基準・原則であるその信念をすてられる。だが、憑依されて信念の化身となっている場合、信念がそのひとを無情に犠牲とする。

（**妄想の体系―転倒した世界への幽閉**）信念自体が正しいものならば、これに憑依されようと化身になろうと信念の活動自体は意味をもち、憑依・化身は、信念のひとの望むところかも知れない。だが、信念は誤りうる。誤ったものへの化身は、（反真実、反主体性という）二重の転倒であり、それ自体としては、救いがたい徒労となる。ひとは、感覚的直接性を超えて理性的普遍の世界に生きる。現実を理性で普遍的に解釈するが、その解釈は、現実の内的本質に迫るよりも、むしろ現実離れしたものになることも少なくない。信念は、主観的で一部の者のみの描く世界であり、現実離れをした妄想の体系を作ってこれに閉じこもるものともなる。地球が動き回っていても、天空の星の方が回っていると解釈できる。惑星の動きの惑いは、別の小円を描いて合理的に解釈され、転倒した世界（天動説）は精緻に体系化される。

信念は、信の世界であり、知りえていないものについて、これを想像し解釈するのであり、妄想の世界と重なる。シュリーマンの「トロイ」の遺跡への想いは、いまでも妄想とみなすことができる。かれの場合は、たまたまトロイと称してもいいような遺跡に出会ったが、信念の妄想の世界をつむぎだしてそのなかに無意味な一生を終った者は少なくない。自分ひとりが「逆立ちは万病にきく」と確信＝信念をもって、テレビを逆さに置いたりしても、あまり問題にはならないであろうが、「ユートピア村を実現しよう」と皆に呼びかけたりすると、これに巻き込まれたものは大変で社会問題となる。信念を抱く者がひとりだけなら、ほころびも生じやすいが、同じ信念の者が集まると、これを巧みに補修する者をえて、その妄想の体系を作り上げ、信念の精緻な妄想世界にみんなで閉じこもる。その転倒した世界に充足してしまい、これから抜け出すことは困難となる。いずれは、理性と現実がこれを解体することになるが、その間、近づいた者をこの妄想体系に呑み込み犠牲にしつづける。

５．近代日本に適合した「信念」

（**個人主義、合理主義の時代の申し子**）信念は、周囲の他者とは異なることを自覚してい

だく個人の合理的な確信であり、これを自らの理性的な行動の原理・原則とし生き方としようという主体的個人のものである。個人が突出することをきらう全体主義、ロゴスよりはパトスを尊重しがちの非合理主義のわが国の精神的風土のなかで、信念のその理性性や個人性は、この精神に反するものとして、一見、受け入れにくいように思える。だが、理性的な個人は、近代の国家社会をささえていくためには、必要な存在である。そのことはヨーロッパでも似た事情にあったはずで、Ueberzeugung（信念＝確信）を、ヘーゲルは、（主観的な）道徳の頂点におき（『法哲学』「道徳性」の項（§140）、参照）、これを「近代のもと」に位置付けている（『宗教哲学講義』第一部Ｂ.Ⅱ.１.ｃ）。わが国は、明治になると、そういう近代の資本主義の道を歩むことになり、同様に、理性的な自立した個人が求められるようになった。しかし、この国では、その度合いは低くなっているとはいえ、全体主義的没個人主義的な精神風土は、現代にいたるまで根強く生きているし、パトス的なものを尊重する姿勢も同様である。したがって、この精神にあまりさからわず、これに受け入れられるような形で、個人の合理性・個人性も生かされるのが望ましいことになる。信念は、このことにかなった特性をもつ。というか、個人主義の国で Ueberzeugung（確信＝信念）等といわれるものが、全体主義的日本的に彩られたものが、日本的な「信念」となっているのであろう。

（**パトスの尊重**）「信念」は、その「念」において、情念的なものを感じさせる。第一に、その確信するものについて、理性が納得しても、感性が賛成しなかったら、自分の信念とまではしないのである。自分が与し、ひいきできるものでないと、確信は信念とまではならない。われわれの信念は、理性的なものであるとともに、これに生きるものとして各自のパトスに受け入れられることを不可欠としている。

さらに、この信念を貫徹して行く段になると、「念」のパトス性は、推進力として大きな意味をもつ。われわれの信念の「念」は、理性的な「理念」や「観念」であるよりは、「執念」や「一念」の情念的なものが濃厚なのではないか。信念は、堅く貫くものとの感が強い。「信念をもっている」ことは、「根性がある」「気骨、気概に富む」ことと重なる。困難に耐えておのれを貫くことを示すこれらの言葉は、身体のささえをもつ感情的なものを色濃く持っている。信念も、その「念」において、これらの持続力としての情念的な根性とか気骨にあずかっているのであろう。

（**全体に対して遠慮する信念**）近代社会は、個人が自由にその能力を発揮して、能力あるものが先駆していくことを大切にする。そのことで産業も科学も飛躍していくこととなった。個人が自由に活動する個人主義が求められるようになった。資本制においては、自分の儲けのためにという「自己愛」のエゴに生きればよい、それで、全体も発展していくのだといわれることとなった。だが、わが国の場合、根強く全体主義的である。みんな同一の黒髪、同じ黒い目、同じ肌色をもって生理的にも全体主義的で、個の突出は、いまだに悪とみなされがちである。

われわれの確信＝信念は、このこともあってであろう、うまく全体が受容できるように

なっている。信念をいだくひとは、その信念について、ひとに吹聴して尊大に振舞おうとはしない。理性的説得力をもつ確信だからといっても、その信念をひとに強要するような高慢な姿勢はもたない。自分をおだやかに全体から切り離すのみである。Ueberzeugung, conviction(=完璧に、証明し、納得させる)の信念とちがい、他者にその信念を押し付けることは、われわれの「信念」ということばのうちにはない。信念のひとは、働き蜂のように、「私がまず、斥候として先駆してみましょう」と、ひとり遠方に飛んでいく。「自分は正しいのだ、確信できることだ、諸君は、無知蒙昧だ、ついてこい」というような尊大な個人主義の姿勢をとらないのが、というか、角を磨り落として、とれなくして落ち着いたのが、われわれの「信念」なのではないか。

われわれは、多言をあまり評価しない。しつこい「言挙げ」をきらう。信念は、確信であり、そとに表現して「確言」にまで進む傾向をもつ。確かなことと信じているのに、周囲は無理解で対立的ですらあるのが信念の環境であれば、説得的になり、抗議するような言挙げの姿勢をとりやすいはずだが、それをわれわれの信念ではあまりしない。ひとこと、「これは、私の信念です」と、断言・宣言して、沈黙する。そのことで、全体は、その特殊個人的な信念に与しなくてもよいことを確認でき、信念のひとも、全体からその点では分離することを了解してもらって、落ち着くのである（信念が政治運動など集団の数の力を求めるものの場合、説得的になり押し付けがましくなる。しかし、それは、その信念の内容の特殊性によることで、信念の心構え自体によるものではないであろう）。

（**純粋さ、清明心**）信念は、個人が周囲に異を唱える形で自説を展開するものになるが、意外に、それは、エゴの醜さをもっていない。個人的なものと周知されているのに、信念をもつこと自体は、決して自分勝手な振る舞いとして蔑視されるようなことはない。

周囲と異なったものを確信するのだとしても、それを押し付けようとするものでないこともあろうが、なにより、その原理・原則としての普遍的理性的な信念内容からして、エゴとは無縁となるのであろう。私的な選好にはじまったとしても、これを昇華して利己自体は滅却して、その理想の化身として信念をいだいているのである。信念のうちに我を忘れきって、その信念に献身する無私の姿は、われわれには、純粋さとなる。信念は、個人的なものでありながら、そういう自己滅却的なものとして、われわれの好むこころの有り方としての、隠し立てなく無私の清さ明るさにかなうものとなるのである。

The Irrationality of Sin-nen as Rational Faith－The Dialectical Analysis of Modern Japanese Secular Faith in Each Principle－

Yoshiki KONDO

Japanese like as other peoples have various beliefs which cannot be exactly

translated into foreign language. Among them there is a rational modern faith which is named Sin-nen in Japanese. This “Sin-nen”faith is composed of Sin(=faith,believe) and Nen(=idea,think) in Chinese character. Our “Sin-nen”faith is used by each individuals as the firm rational faith in the principle or canon of their life.

Like the conviction, “Sin-nen”faith has the rational character. Generally faith and belief are built on the rejection of doubt about the information to believe. “Sin-nen”faith renounces this doubt for the firm reason.

But on the contrary our Japanese “Sin-nen”faith has the irrational character, too. Among many reasons and principles concerning same matter, a person of “Sin-nen”faith must select one. This selection is executed with individual irrational motives.

Our “Sin-nen”faith must be constructed not only from rational conviction but also from voluntary participation. If in this faith we don’t take part in it, we cannot call this faith as “Sin-nen”faith but it’s only conviction without the participation. In “Sin-nen”faith we are voluntary or autonomous and have the will to participate.

But sometimes this voluntary “Sin-nen”faith changes into some reverse involuntary state as embodiment in which we lose our rational autonomous mind and are the slaves of “Sin-nen”faith.

平成 16 年 10 月　　広島大学倫理学研究会　『倫理学研究』第 15 巻 1~19 頁